

中国とインド アジアの二大国とどう付き合うか

日本では、10年ほど前から中国の経済発展に注目が集まり、中国ブームとも言うべき状況が続いたが、最近では、もう一つの大国インドに対する関心が高まっている。中国の人口は13億人、インドの人口は11億人であり、この二国を合わせると世界の人口の4割近くを占めており、世界、地球の将来にとって、このアジアの二大国の行方は極めて重要である。

明治維新以降の日本を振り返ってみると、「脱亜入欧」の言葉に象徴されるように、日本はもっぱら欧米のほうを向いて近代化を進め、アジアの国々と真摯に向き合うことは少なかったと思う。特に、戦後は米国の影響力が強く、社会主義革命が進行していた中国や貧しい途上国であったインドは、決して身近な存在ではなかった。しかし、日本にとって中国は文化・文明の源であり、漢字、思想、技術など古代より日本は中国から多くを学んだ。また、日本人の多くはインドを東アジアとは異なる文明として考えているようであるが、日本国家の成立期より深い影響を与えた仏教は周知のとおりインドが起源であり、日本語自体も南インドが起源である可能性が高い（大野晋説）。日本の近代化は、こうしたアジア諸国から自らを離脱させることで成し遂げられたとも言えるが、ここに来てアジア諸国との関係再構築が大きな課題になっている。

ところが、近年急速に接近してきた中国との関係は、中国での反日デモと靖国神社参拝問題で雲行きが怪しくなっている。また、韓国との関係も、「冬のソナタ」により「韓流ブーム」が起きたものの、歴史認識を巡って両国間に感情的なしこりが残っている。こうした状況からわかることは、それぞれの国民の中に歴史というものがいかに根強く生き続けているかということである。近代日本は、日清戦争、日露戦争を経て、韓国併合を行い、その後ずるずると日中戦争に突入していった。戦争末期の東京大空襲、沖縄戦、原爆は日本の戦争被害者としての側面であるが、戦時中のアジア諸国での日本軍の行為は、その後もアジア諸国民の反感の対象であった。こうした歴史問題の解決なくして真の「東アジアの連携」はありえないことを自覚すべきであろう。インドは、第二次大戦中にチャンドラボースを指導者とするインド国民軍を組織し日本とともにイギリスの植民地支配と戦ったという経験もあって、対日感情は中国とは異なっているが、そのインドでも、近年、ヒन्दゥー・ナショナリズムの影響力が増し、3500年前のアーリア人侵入の評価を巡って論争が起きている。北朝鮮問題についても、昨今は拉致問題のみがやや感情的に取り上げられているようであるが、この問題は戦前の歴史も踏まえてもう少し冷静に対処すべきであろう。

日本では、F T Aが日本企業の対外進出のための武器として考えられているような感があるが、地域の平和共存・安定というより広く深い理念をもってF T Aを進める必要があるだろう。私は、こうしたアジア地域の将来と日本の対応を考える上で、『平和の経済的帰結』（1919年）で戦勝国のドイツに対する多額の賠償請求を批判し、欧州の地域統合による政治的・経済的安定を主張したケインズ思想に学ぶべきものがあると考えている。

（主任研究員 清水徹朗）